

ロシア中世の世界

—年代記編纂の歴史から、とくに『絵入り年代記集成』について—⁽¹⁾

栗生沢 猛 夫

はじめに

本稿は、ロシア「中世」がいかなる時代であったかを、中世研究の主要史料である「年代記」の編纂の歴史に焦点を合わせながら、考えてみようとするものである。具体的に何をどのように考察するかについて記す前に、まずロシア「中世」、およびその時期のロシアの呼称「ルーシ」についてあらかじめ説明しておきたい。

ロシア「中世」*srednevekov'e*は、伝統的な見方では、およそ一七世紀末までの時期をさす。これは世界史研究の通常の場合とは大きく異なる用法で、いわゆる近世ないし近代初期をも包摂している。ロシア「中世」がいささか特殊である理由は、この国の近代化がヨーロッパに比して大幅に遅れて

始められたことと関係している。「中世ロシア」は、ロシアでは元来「*stevnia Rus'* (古ルーシ)」とよばれた。これは「古代ルーシ」と訳出するのは適切ではない。自国史においては古代であっても、「世界史」的にみればそうではないからである。ロシア史には通常いわれる「古代」(つまり古典古代)がなかったことを確認しておきたい。「中世」はこの場合、古代と近代の間の時代を意味するのではなく、学術用語として比較史的、便宜的に使用されている。

一方「ルーシ」は、近代化を推進したピョートル一世(皇帝在位一六八二—一七二五年)以前のロシアをさす語であるが、これをわざわざ「古」ルーシと呼んだのは、最古の時代(キエフ時代、九—一三世紀)をとくに区別してそう呼ぶことがあったからであるが、何といつても、ピョートルによる改革

がそれだけ衝撃的で、近現代の人々にとってかれ以前のルーシが丸ごと、遠く古い時代のように感じられたことが決定的であった。ロシアの近代化はもとよりピョートルによって突如として始められたわけではないが、「古ルーシ」は、かれの治世がその後の人々に圧倒的な印象を与えたことをうかがわせる語となつていたのである。

さてこうした時代のロシア（ルーシ）について論じようとする際に、本稿の筆者が念頭においているのは、もっぱら次のようなことである。

ロシアはこれまで、ヨーロッパとは異質の、「東方的」（あるいは「アジア的」）な社会として描かれることが少なくなかった。こうした見方は、モスクワが急成長しロシア統一の担い手として現れる一五世紀後半から、ロシア（モスコヴィア）をひんばんに訪れるようになったヨーロッパ人來訪者による覚書や報告書等に端を発しているが、その後も近現代の欧米の歴史研究者によつていっそう増幅され、広く受け容れられるようになった。あくまでもヨーロッパ人の側からする見方である。はたしてこのようなロシア像は現実のロシアを正確に反映したものといえるであろうか。その妥当性についてあらためて考えてみようというのが本稿の主旨である。

一 中世ロシア史研究の主要史料としての年代記

ロシア中世史研究にとつての史資料は多種多様である。ただし文献（史料）に限定するならば、年代記類が最大、最重要な情報源であるということができる。一九世紀前半、ロシア帝国政府の肝いりで「ロシア年代記全集」の刊行が始まり、それはソヴィエト時代にも、またその崩壊後の今日のロシアにおいても発行され続け、今日では総計、大型本で四三巻を数えるにいたつて⁽²⁾いる。

「全集」の第一巻は、いわゆる「ロシア原初年代記」で、一八四六年に刊行された。その最初の版を完成させたと考えられる修道士名から「ネストル年代記」と呼ばれることもある。学術的には冒頭の句から「過ぎし年月の物語」と呼ばれるのが一般的であるが、本稿では「原初」と略記する。それは最初期ロシアの歴史研究にとつて根本史料であると同時に、それ以降に書かれたほとんどすべての年代記の冒頭部におかれる基本的年代記である。まずはこの年代記から始めよう。

二 『ロシア原初年代記』を読む

— キエフ・ルーシの時代

ロシアが国家としての歩みを始めたのは、「原初」によれば、九世紀半ばから後半にかけてのことであるが、このロシアの誕生から一二世紀初頭にいたるまでの歴史を、キリスト教的に構想された世界史の中に位置づけつつ記述しようとしたのが「原初」である。その記述にどこまで信憑性を認めるかは大問題で、まさにこれを確かめるのが歴史研究者の責務であるが、少なくとも、その作者（ないし編者）、あるいはかれ（ないしかれら）が代弁したと推測される為政者や教会当局が、自らの生い立ち（民族ないし国としての起源）をどのようにみていたか、自己の存在をどのように認識していたかが、ここに表現されているとみることができる。

「原初」の全体像についてここで立ち入って論じるわけにはいかないが、その成立時期や構成について最小限のことは記しておこう。

「原初」は複雑な編纂過程を経て最終的には一二世紀初頭に成立した。ルーシの存在が周辺諸国（南西方面のビザンツ帝国、南東方のバグダードを中心とするアッバース朝、北西方のスカンディナヴィア、また南ドイツ諸国などの西方ヨーロッパ）に知られるようになったのは、八、九世紀になって

からのことといつてよいが（それはキエフ・ルーシが建国されたと考えられる時期、ないしその少し前のことである）、その後ビザンツから正式にキリスト教を受容し、文明化を加速させるのが一〇世紀末であるので、「原初」の成立は、ルーシが周辺諸国から存在を認識されてから二世紀余り後、またキリスト教受容の約一二〇年後ということになる。この時点でルーシ人がはじめて自身を対象化し、客観化することができたともいえる。

「原初」は次のように始められている。

「ルーシの地はどこから起こったか。誰がキエフで最初に公として治め始めたか。」

これが冒頭の句であるが、ここには編者が何を明らかにしたいと意図していたのが端的に述べられている。編者はこの後すぐに「さて物語を始めよう」と続け、「大洪水の後、ノアの最初の息子たちセム、ハム、ヤベテは地を分け、東のすべてはセムの手に……ハムには南の国が……ヤベテには北および西の国々が手に入った……」と展開していく。

「原初」の編者はこのように、ルーシの歴史を、旧約聖書「創世記」のノアの大洪水後の時期から始めている。ルーシの民は洪水を生き延びたノアに発し、その三人の子の末子、ヤベテの子孫である。ヤベテがノアから与えられたのは、パレスチナやメソポタミアから見て「北および西の国々」であるが、

ルーシもそこに配置された民族ないし国の一つである。その後、いつの時点のことか不明であるが、相当の期間を経て、ドナウ川方面に進出し、やがて現居住地に定住するに至ったとされる。

「ルーシ」が初めてその名で呼ばれるようになったのは西暦八五二年の項である⁵⁾。これは「原初」が年代を記した最初の年でもあるが、このことは、それまで自らが世界創造ともにも始まった歴史時間軸のどの時点にいるのかを知らずにいたルーシ人が、この時になって初めて「世界史」の経過の中に自己を位置づけることができたことを示している。かれらが八五二年という年代を知ったのは、もちろんビザンツからである。この年はビザンツ皇帝ミカエル三世の即位の年であると記されている（実際にはミカエルの即位年は八四二年であるが、この食い違いのもつ問題性にはここではふれない）。この年に「ルーシ」がコンスタンティノープルに攻め寄せたとビザンツの歴史書に書きとめられたことから、「原初」の編者もこれをルーシの歴史が最初に「世界史」に位置づけられた年と認識したのである。

この後ルーシの歴史は、ビザンツ式年代表記法によりながら（すなわち前五五〇八年を世界創造の年とみて、これを元年とした「世界創造紀元」である。先の西暦八五二年は、この方式では六三六〇年となり、「原初」ではこちらの数字が

記される）、基本的には編年体で書き進められるが、記述そのものは歴代キエフ公の治世ごとに進められる（九世紀末から一二世紀初まで、オレーグからスヴァトポルク・イジヤスラヴィチ公にいたる二三〇年余のことが記述される）。

以上が「原初」のおおよその構成であり、内容である。以下筆者が「原初」を基本に据えて明らかにしようとするのは、とくにキエフ国家と社会が、自らを取り囲む周辺世界との間にはいかなる関係を取り結んでいたかという点である。

キエフ国家に限らず、およそすべての歴史的存在が周辺世界から切り離して論じられないことは言うまでもない。にもかかわらず、あえてこうした課題を設定するには理由がある。従来の研究では、キエフ国家は主にビザンツ帝国との関係を中心に論じられてきた。このことは誤りではない。キエフ・ルーシがビザンツとの接触を通じて文明化の道を歩んだことは疑いのない事実であるからである。とりわけビザンツからキリスト教を受容して国教となしたことは決定的であった。しかしながら、対ビザンツ関係にのみ関心を集中させることはルーシ像にある種の歪みをもたらすことになる。筆者の考えでは、こうした視点の下では、キエフ・ルーシはヨーロッパと対立する存在とみなされることになりやすいのである。

説明が必要かもしれない。欧米における伝統的な見方では、

ビザンツ（東ローマ）帝国は西方とは異質の東方的存在として対立的に理解されることが少なくなかった。その背景にはギリシア、ラテン両文化圏間の次第に深刻化する相違と対立、とくに一一世紀半ばに決定的となったローマ、コンスタンティノープル両教会間の分裂（シスマ）、また十字軍、とりわけ「聖地」パレスチナではなく、コンスタンティノープルを陥れたいいわゆる第四回十字軍（一二〇四年）の事例などがあるだろう。もちろんこうした見方に疑問を呈する研究者もいないわけではないが、欧米人の通念を形成するのは、まさにビザンツの非ヨーロッパ性という捉え方である。こうした観点からすると、ビザンツ文明圏の影響下にあるとされるルーシも、当然のこととして非ヨーロッパ的、「東方的」存在とされることになる。「非ヨーロッパ」をただちに「東方的」と置き換えることができるか、その場合の「東方」とはいつたい何なのかについては、いまは措いておこう。いずれにせよ、はたしてこうした見方は正しいのか、どの程度現実を反映しているのか、再検討が必要ではないか、というのがここで問いたいことである。史料に即して、筆者なりにこの問題を再検討してみたいと考える。

既述のごとく、ロシアの建国はおよそ紀元九世紀後半のことと考えられる。「原初」によれば、八六二年ごろ「海の向こう」から「ヴァリヤーギ」のリューリクら三人兄弟が招かれ北部

ロシアに君臨したが、その後単独支配者となったリューリクが二〇年後に南下してドニエプル川中流域を手に入れ、南北ルーシにたいする支配権を樹立したという（いわゆる「ヴァリヤーギ招致物語」ないし「リューリク招致伝説」）。これはあくまでも伝説であるが、キエフ公国がこのころに成立したこと自体、また建国が北方から来た「ルーシ」を中心に行われたことも、おそらくは確かな事実とみてよいであろう。

キエフ国家はその後ビザンツからキリスト教（ギリシア正教）を導入し（「ルーシの洗礼」）、主にそのことからビザンツ文明圏に属す一国家とみなされるようになったこと、そのことのもつ問題性についても先に指摘した。

これにたいし、ロシアが最初期から「ヨーロッパ」と密接な関係にあったことを忘れてはならないというのが、筆者の主張である。キエフ・ルーシは「ヨーロッパ」の東辺境に位置するものの、ときにその内的存在としてあったことに留意する必要があると考えるのである。

キエフ国家がヨーロッパと強い結びつきを有していたことは、さまざまな局面において示すことができる。先の「リューリク招致伝説」自体がそれを物語っている。そこにいわゆる「海の向こう」の「海」はバルト海を指すことが明らかで、そこからやってきた「リューリク」は伝説的人物であるとしても、かれを含む「ヴァリヤーギ」と呼ばれる人々は実際に

スカンディナヴィア方面からの到来者であつた。當時はヴァイキングの時代であり、その一部は東のルーシ方面へ進出して「ヴァリヤギ」と呼ばれたと考えられる。¹¹⁾キリスト教受容の問題についても同様に考える必要がある。既述のごとく、従来は「ビザンツ」からの導入という点が強調されていた。ギリシア正教とカトリックとの、ビザンツと西ヨーロッパとの異質性が重視されたのである。しかしコンスタンティノブルとローマを中心をおく二つの教会が決定的に対立し、分裂するのは一一世紀半ば以降のことで、キリスト教を受容した当時のキエフは「ギリシア（東方）正教」というより、「キリスト教」を受容したと捉えるのがより適切である。現にルーシ国家による公式的受容に先んじて、自身がコンスタンティノブルで洗礼を受けたオリガ公妃（九六四年没）は、皇帝との関係が思わしくないと見定めるや、後に神聖ローマ皇帝を名乗ることになるドイツ王オットー一世（九三六—九七三年在位）に接触を試みている。オットー側もこれに積極的に対応し、キエフへ司教を派遣している。¹²⁾「ルーシの洗礼」後しばらくの間ルーシ・ビザンツ関係が安定しなかつたことを念頭におくならば、この時点で「ギリシア正教」という要素を過度に強調することは、非歴史的のそしりをまぬかれないと考える。

キエフ国家とヨーロッパ諸国の間には政治経済、宗教文化

的に活発な交流があつた。キエフ・ルーシを周辺諸国と結びつける交易路に関しては、従来とくに「ヴァリヤギからギリシアへの道」、すなわちルーシを南北に貫く道の重要性が強調されていたが、近年これと並んでルーシを東西に結ぶ「下イツからハザールへの道」の存在も注目されている。¹³⁾

ルーシとヨーロッパとの緊密な関係を物語る一つの例として、ここではとくにキエフ大公家とヨーロッパ諸王家・貴族家門との間の活発な婚姻関係に注目してみよう。キエフ大公家は、ビザンツ帝国はいうまでもなく、北欧諸国、ポーランド、チェコ、ハンガリー、神聖ローマ帝国をはじめとするドイツ諸国、さらにはフランスの諸王家・貴族家門と婚姻関係で結びついてきた。今日六〇を超える事例が知られている。¹⁴⁾キリスト教導入後の一〇世紀末から一二世紀三〇年代までの一五〇年間にキエフに君臨した大公は九人であるが、そのほぼ全員がキリスト教国（ビザンツを含むが、大部分は西方カトリック諸国）から妃を迎えていた。とりわけ重要なのがヤロスラフ賢公（大公在位一〇九一—一〇五四）とその子・孫らの場合である。ヤロスラフ自身がスウェーデン王ウーロヴ・シェートコヌングの娘インギゲルドを妻に迎えていた。かれの子（対象となるのは男女計七人）のうち婚姻関係が判明しているのは六人であるが、それぞれポーランド、ハンガリー、ドイツ、ノルウェー、フランスそしてビザンツの王（皇

族と結婚していた。なかでも娘の一人アンナはフランス、カペー朝のアンリ一世（在位一〇三一一—一〇六〇年）の再婚相手であり、かの女は三人の子（フィリップ、ロベール、ユーク）の母であった（そのうちフィリップは父の後を継いで王位に就く）。またヤロスラフの孫の世代も注目される。とくにエウブラクシヤはヤロスラフの子フセヴォロド（大公一〇七八—一〇九三年在位）の娘であるが、神聖ローマ皇帝ハインリヒ四世（一〇五六—一〇六年在位）に嫁いだ（両者ともに再婚であった）。この注目すべき結婚はエウブラクシヤ本人にとつては大きな悲劇、他方ローマ教皇グレゴリウス七世、またその後のウルバヌス二世との間で叙任権闘争の真つ只中にあつた皇帝ハインリヒ四世にとつては一大スキャンダルとして記憶されている。ここでは纏説しないが、いずれにせよキエフの公子・公女が当時のヨーロッパにおいて少なからぬ役割をはたしていたことはより注目されてよい。言うまでもなくこうした活発な婚姻関係はキエフとヨーロッパ諸国家・諸王家間に共通の宗教文化的、精神的基盤があつて初めて可能となる。それは当時キエフが形成途上のヨーロッパの一構成員であつたこと、その外的というより、内的存在であつたことを如実に物語っていると見えよう。

三 モスクワ国家をどうみるか

さてキエフ・ルーシがヨーロッパ内的存在であつたとするならば、その後のロシアはどのように捉えられるであろうか。ロシアとヨーロッパの関係は一時期（一三一—一五世紀）ほぼ絶たれた。これには大きく言つて二つの原因がある。第一は、カトリック圏からのロシアに対する政治的、軍事的攻勢が始まつたこと（とりわけドイツ騎士団からの攻撃、いわゆる「北の十字軍」の問題）、第二にはロシアがモンゴル支配下に入ったこと（一三世紀三〇年代—一五世紀末のいわゆる「タタールのくびき」）である。一三一—一五世紀のロシアは、西方世界とは疎遠で、敵対的關係にあつたと言つてよい。とくに西方で直接国境を接するリトアニアとポーランドが「ヨーロッパの防波堤」として西方への接近を志向するロシアの前に立ちはだかつたことが大きく作用した（ポーランド、リトアニア両国は、後者が一四世紀後半にカトリック化するに及んでヤギェウォ朝合同国家を形成するにいたる）。西方との交流を絶たれたロシアは、モンゴル（キプチャク・カン国）支配下にあつて、その顔を大きく東方へ向けることとなつた。かくてロシアはこの時期ヨーロッパの外に出たかの感があつた。ただしこうした流れを絶対化したり、過大に評価することは問題である。

チンギス・カンの孫バトゥ軍のロシア侵入とその後のモンゴル「支配」の実態を明らかにする必要があるのである。そうした努力なくして、正確な評価が不可能なことは言うまでもない。モンゴルの侵入とこの時期のロシアについても各種年代記が主要な史料であった。ただし筆者はこれについてはすでに検討したことがあるので、ここで繰り返すことは控えたい。¹⁵バトゥの侵入による被害が相当のものであったことが確認されるにせよ、その後の支配が、中国（元朝）などの場合とは異なつて、「間接的」に行われたことが重要である。支配が「くびき」であつたとしても、ロシアがあたかもそれで本質的に性格を変えたわけでも、ましてや存在を止めたわけでもなかつたのである。

現に事態は一五世紀中ごろから大きく動き始める。このとき「タタールのくびき」に終止符が打たれたのである。その大前提となつたのが、言うまでもなく、モスクワの急速な勢力伸張である。ロシアはモスクワ大公権の下に統一国家として立ち現れる。一方、ビザンツ帝国が衰退から滅亡へと向かつたことも大きい。モスクワはビザンツに代わる「正教」世界の指導者の地位を志向するようになる。この時期提唱された「モスクワ・第三ローマ」¹⁶理念はこうしたモスクワの「自覚」を教会の側から表明したものであつた。一五世紀後半モスクワ大公イヴァン三世の時代には西方との交流が復活、著しく

活性化したことが知られている。イヴァン三世とビザンツ最後の皇帝の姪ゾエ（ソフィヤ）との結婚（一四七二年）も、ゾエを後見したローマ教皇庁のイニシアティブによるところが大きかつた。花嫁に付き従つて多くのギリシア人やイタリヤ人がモスクワにやつてきた。モスクワ・クレムリはこの時期ルネサンス期イタリヤ職人の指導下で、基本的部分で今日見られる姿に建造された。西方から多くの軍人、職人、医師、薬剤師等の各種専門家、技術者が到来する。一六世紀中ごろにはイギリス人により北極海・白海航路が開拓され、バルト海への進出を阻害されていたロシアに朗報がもたらされる。ロンドンに「モスクワ会社」が設立されて、英露間に直接的通商関係ができあがる。世紀末からはオランダ商人が活躍を始める。モスクワにおける西洋人居住者の増大は、結果としてモスクワに外国人村（「ドイツ人村」）を成立させる。¹⁷

およそ以上のような歴史的経緯の中で、近代の門口に立つロシア（モスクワ・ルーシ）はどう特徴づけられるであろうか。ロシアは西か東か、あるいは西と東（ヨーロッパとアジア）の中でいかなる位置を占めるか、という問題が重要性を獲得する。いうまでもなくこうした二者択一の問題設定は、現実的にはあまり意味をもたない。にもかかわらずそれが重要だと考えられた理由は、問題がロシア人のアイデンティティに関わるように思われたからである。ロシア人自身

がそれをどこに求めるべきか、あるいは自分たちがどの方向へ進むべきかを問うた問題であつたのである。こうした問題意識は早くから芽生えたと考えられるが、それが強く意識されるようになったのは近代になつてから、とりわけ一九世紀の知識人たちにおいてである。「西欧派」と「スラヴ派」の論争がよく知られているが、ロシアはヨーロッパ的価値観を共有し、その道を歩むのか、それともこれを拒否して、独自の道を歩むのが激しく論じられた（実際には、近代国家としての物質的基盤は「ヨーロッパ」的である以外にはなかつたので、これは拒否すべくもなかつたのであるが）。「ロシアとヨーロッパ」問題の顕在化である。日本の場合にも同様の問題はあつたが、独自の文化発展（オルターナティブの提示）が相対的に弱かつたロシアでは、この問題はより深刻な意味をもつたと考えられる。

筆者はこの点について次のように考えている。モスクワ時代のロシアがモンゴルの支配を脱し、その後とくに東方へむけて領土を急速に拡大させ（イヴァン四世雷帝治世におけるヴォルガ川流域のカザン・カン国、アストラハン・カン国の併合、一五五二—一五五六年。これ以後「ロシアの東漸」は急速で、早くも一六三九年にはオホーツク海沿岸にまで到達している）、地理的には明確に「ユーラシア」国家となつたが、思想的、精神的構造の面ではロシア人に本質的、根底的

な変化はなかつた。この時期のロシア人にとつても、以上に示されたように、西方諸国との関係が基本的な重要性をもち続けたと考えられるのである。ときにモスクワ国家をモンゴルの後継（継承）国家とみる研究者もいるが、「モンゴル後継」国家の意味が明らかにされていないだけでなく、そうしたことを示す確かな証拠もほとんど提出されていないと筆者はみている。

四 モスクワ国家における年代記編纂

—とくに「絵入り年代記集成」について

以上のように、「ヨーロッパ」との関係はモスクワ国家の時代においても基本的な問題であり続けたが、以下本節においては、とくにこの時代の年代記編纂の歴史をみることで、この点をやや異なる側面からも確認してみたい。

ロシアにおける年代記編纂は「原初」以後も継続された。ここで詳しくたどることはしないが、キエフ国家が政治的に分裂し、ドニエプル川中流域以外の諸地方が成長するにつれて、キエフが中心であつた年代記編纂はやがて他の地方においても行われるようになった。北西ルーシのノヴゴロドやプスコフではとくに活発であつたが、さらにガリーチ（南西ルーシ）、ウラジーミル・スーズダリ・ロストフ（北東ルーシ）

シ)などが、中心地として名乗り出てくる。モンゴル侵入後しばらくの間年代記編纂は途絶えるが、直接の侵入をまぬかれた北西ルーシにおいては続けられ、また他の諸中心地(トヴェーリ、ロストフ、モスクワ)においてもその後復活、あるいは新たに開始される。とくにノヴゴロドでは「ノヴゴロド年代記」や「ソフイヤ年代記」など重要な編纂が相次ぐが、次第にモスクワが最重要中心地となる。政治的・軍事的に急速に勢力を強めつつあったモスクワは、ロシアの中心としての立場から年代記編纂を活発に行いだけたのである。そこではたんに「モスクワ中心」的というだけでなく、「全ルーシ」的な記述が行われるようになった。

モスクワ国家における年代記編纂はとくに一五世紀後半から一六世紀において活発化したが、これはモスクワ国家がもつとも強化化した時期にあたっている。大公でいえば、イヴァン三世(「大イヴァン」Ivan Velikiとよばれた)、ヴァシーリー三世、イヴァン四世(雷帝)と続く、父・子・孫三代の治世である(一四六二—一五八四年)。この時代に、いずれもモスクワ国家と教会の研究にとつて不可欠な史料である「ヴォスクレセンスカヤ年代記」²³⁾、「ニコン年代記」²⁴⁾、「リヴォフ年代記」²⁵⁾などの壮大な年代記が編まれた。年代記はモスクワ府主教庁や有力な修道院等で編まれるのが通例であるが、一五世紀末から一六世紀、とりわけイヴァン雷帝治世には、

国家当局の主導的役割が目につくようになり、自ら多くの著述を物した雷帝の場合、自身直接関与したと考えられている。

雷帝治世には上記諸年代記以外にも、いくつかの注目すべき年代記的文学作品が作成された。なかでも注目されるのは、「スチェペーンナヤ・クニガ」である。これは、ロシア最初のキリスト教徒君主オリガとその孫でルーシの洗礼者であるウラジーミル聖公に始まり、イヴァン四世雷帝にいたる諸大公、府主教の治世を一七の階梯(スチェーベニ)に分かつつ、ロシア史を聖なる歴史として描き出すもので、この聖史が完成するのがイヴァン雷帝治世とされている。ここではモスクワ国家と君主が聖なる存在と称えられているだけでなく、キエフ・ルーシの遺産を直接受け継ぐものと捉えられている。イヴァン雷帝を正教会の立場から支えたモスクワ府主教マカーリーにより作成された「大教会暦(ヴェリーキエ・ミネイ・チェチイ)」も、正教会と諸聖人の権威を援用することにより、モスクワ国家の聖化を図った点で重要であった。これは当時ロシアで知られる限りの内外の聖者伝その他の教会文献をとりまとめたような書物で、月毎に分けられた一二冊の巨大な文献であった(大判で二万七〇〇〇頁以上ある)。原語にいう「ミネイ」とはギリシア語の「月」を意味する語からきている。聖者伝や教父の著述等を日々読めるように月ごとにまとめて編まれていた。²⁶⁾一五世紀末ないし一六世紀初

には、既述のごとく、モスクワを「第三の」、最後のローマ（第四のローマは存在しないであろう）であると思想も表明され、正教会の立場から見てモスクワこそが「世界史」の最終局面を飾る、神に選ばれた帝国とする一種の宗教的メシアニズムがみられたが、以上はモスクワ国家と教会のこうしたイデオロギーを文学的に表現したものとみることができると。「第三ローマ」理念には、モスクワが二つの「ローマ」（ローマとコンスタンティノープル）を介してヨーロッパ、すなわちキリスト教「世界」と堅く結びつけられているとする自覚が表明されていたとみることができ、ここにもロシアが自身をその一員と認識していた証拠をみることができると。

ところでまさにモスクワ国家のこうした主張をもっともよく表現した作品が、近年改めて注目をあびている。「絵入り年代記集成」と呼ばれる一大年代記である。最後にこの年代記を取り上げ、モスクワ時代における知の在り方について考え、ひいてはモスクワがヨーロッパ文化圏に属す存在にほかならなかつたこと、少なくともそのように自己を認識していたことを確認してみる。

「絵入り年代記集成」は（以下「集成」と略記。原語は *Listevoi letopisnyi svod* じ、こちらは LIS と略す）、まずその規模の壮大さと、豪華な体裁とで読む者を圧倒する。オリジナルの写本で（「集成」の写本、すなわちオリジナルの

手稿本については後述する）全一万丁（紙葉）、そこに年代記的テキストとともにそれを図解する一万七〇〇〇とも一万八〇〇〇ともいわれる極彩色の細密画が描かれている（細密画の数は「集成」をどう見るかによって研究者間の見解が異なること、さらに失われた部分が相当あることなどによって、数え方が異なっている）。「絵入り」と称されるゆえんである。このような「集成」の全体が近年はじめて刊行されたのである。

刊行は三部に分けて行われた。最初はその第三部を構成するいわゆる「ロシア史編」で、モスクワのアクテオン社から二〇〇九―二〇一〇年に、「一六世紀の絵入り年代記集成 年代記的ロシア史」の表題のもとにファクシミリ（複写）出版された（全二四巻、第二四巻は補巻）。引き続き二〇一〇―二〇一一年に、「集成」の冒頭部を飾るべき「聖書編」（聖書の歴史、全五巻、最終巻は補巻）が、またほぼ同時に、「集成」の構成上「聖書編」に続き、「ロシア史編」の前におかれるべき「世界史編」ないし「クロノグラフ」部分（『全世界史』、全一一巻、最終巻は補巻）も刊行された。これにより「集成」は全四〇巻（うち補巻三）からなる壮大な年代記集成として、はじめてわれわれの前にその全貌を現すこととなった。²⁶ なお「集成」本体の刊行に先立ち、二〇〇六―二〇〇八年には、校訂テキストを、写本別に（すなわち第一巻「博物館集成」

に始まり第十卷「ツァーリ本」にいたる各巻を）収め、それに学術的解説を付した「学術資料編」全二巻（最終巻は付録 *Prilozhenie* である）も出版された。結局、すべての丁（紙葉）を写真版で刊行する、ファクシミリ版全四〇巻、および補助資料版（テキスト、古文献学的解説など）全二巻の、合計五一巻（冊）となった。

「集成」は壮大な年代記と記したが、とくに細密画の数には驚かされる。写本原本では、まず絵が来てそれにすぐ続いて（ないし脇に並んで）年代記テキストが配されるという形をとっている。「絵入り」というより、絵主体の図解年代記といったほうがよいかもしいない。V・V・モローゾフによれば、細密画は平均して幅一五・五cm、縦一八cmである。これを一万八〇〇枚として、横二五〇枚、縦七二枚を一面に隙間なく並べると、三八・七五m × 一二・九六m ≡ 五〇二・二mとなる。かりに横長の壁面に横六〇〇枚、縦三〇枚を貼り付けたとして、その壁画（九三m × 五四m ≡ 五〇二・二m）を想像してみると、巨大な膨大さが理解できようというものである。

それにしても、これほど巨大で豪華な年代記が全体としてこれまで一度も刊行されたことがなかったのはなぜであろうか。いささか理解に苦しむところである。内容に立ち入る前にまずはその理由を探るところから始めたい。

未刊行の理由として直ちに思いつくことは、それがあまりに巨大な作品で、技術的にも、費用の点でも実現困難であったということであろう（とくに細密画の場合）。ちなみにテキストのみについていえば、既述のごとく、「ルーシ史編」〔集成〕の後半部分、分量としては全体の三分の二ほど）は、一八世紀以来今日まで「ロシア年代記全集」などのなかで個別分散的に、つまり全体をまとめてではないが、まがりなりにも出版され、苦勞をいとわなければ活字版ではほぼ読めるようになっている。〔世界史編〕のテキストの刊行はまだ行われていないが、部分的にはさまざまな形で、たとえばヨセフスの「ユダヤ戦史」（「ユダヤ戦記」）のような個別作品として、また「ギリシア・ローマ年代記」のような年代記の形で読むことができる（後述、注41、42を参照）。ただこの場合、「集成」とそれらの作品や史料との間の厳密な比較検証が必要である。〔集成〕テキストと史料として利用された諸テキストが同じでない、むしろ相当に異なる可能性があるからである。いずれにせよ、〔集成〕がもつ歴史学的、文化史的意義の大きさを考慮にいれるならば（その編纂が国家的な企画であったことは疑うべくもない）、なぜ国家の威信を重視する後のロシア帝国政府と、この点ではまったく変わるところのない、あるいはむしろはるかに凌駕するソヴィエト当局、そして現ロシア国家が、これを全体として刊行しようとしなかったの

かは、問われてしかるべき重要な論点であると考える。とりわけ既述のごとく、これまで知られている中世ロシアのほぼすべての年代記が「ロシア年代記全集」として帝政期から今日に至るまで陸続と刊行されてきたことを考慮するとき、『集成』がそのなかに含まれてこなかった理由はますます大きな謎となる。国家的観点からすると費用の点などさして問題にはならないと考えられるのである。

さてこの理由を探る際に、あらかじめ確認しておくべきなのは、『集成』が全体として刊行される以前は、つまりつい最近までは、基本的に写本の形でしか伝えられていなかったことである。具体的にいえば、それはテクストと一万八〇〇〇の細密画が描かれた一万丁（オリジナルな紙葉）として保存されてきたのである。そしてここで問題となるのが、保存されてきたとはいっても、全体が一所にまとめられていたのではなく、サンクト・ペテルブルクとモスクワの二都市、三図書館に分散保存されてきたことである。このことは研究者が「集成」を全体的に利用することをいちじるしく困難にした。（かりに一所に集中管理されていたとしても、紙葉の膨大な数と重量ゆえに利用は容易ではなかったであろう。）今日に伝わる写本は全部で一〇巻に分かれているが、各巻（平均一八〇〇の細密画が描かれた各一〇〇〇丁の大判の紙葉）は分厚く重く、一巻の利用ですら容易ではない。

それが三か所に分散していたのである。³²⁾

写本の分散保存と記したが、最初からそうであったわけではない。そうなったのは一八世紀の半ば以降のことである（上記三図書館に所蔵されたのは、三写本が一八世紀四〇年代、五本が一九世紀、残りの二本は二〇世紀になってからのことである）。それ以前はどうであったか、そもそも最初の状態はどのようなものであったかという点、実はそれはよくわかっていない。それどころか『集成』がいつ成立したのかも当初は明らかでなく、長年学界の論争の的となってきたのである。

まず最初に、現時点で妥当と考えられる結論を記しておく。「集成」はイヴァン雷帝期の一六世紀七〇年代から八〇年代半ばにかけて作成されたと推測される。³³⁾ 今日に伝わるのはオリジナルな手稿本のみである。多数の細密画を含む豪華本であることから複数の写本が作成される由もなかったと考えられる。膨大な原写本がどこで、どのようにして作成されたかは今日ある程度解明されつつあるが（「宮廷」の所在地で、複数の写筆者グループ・画家集団の参加の下に作成されたことが指摘されている）、いまだ研究上の興味深い論争の対象となつていゝ。いずれにせよ膨大な写本、すなわち紙葉の東（山）は、編纂された後しばらくは作業所（一か所、ないしいくつかの）にあったが、やがて国家ないしツァーリの図

書室ないし宝物室、あるいは府主教（一五八九年以後は総主教）庁図書室に搬入されたと考えられる。しかし作業は中断され、再開されることはなかったようにみえる（テキストは一五六七年で途切れている。またイヴァン雷帝治世にあてられた最終二巻の写本、SとTsでは細密画のほとんどが未彩色のままであり、絵が描かれず、絵のための空欄のみが残されている箇所もある。「集成」は明らかに未完状態で終わっている）。やがてロシアが動乱時代（イヴァン雷帝没後の一六世紀末—一七世紀初）に突入すると、写本の分散、散逸が始まり、おそらく一七世紀前半のうちに各所に散らばった写本の束はそれぞれ独立の写本と考えられるにいたり、その後一七世紀中ごろからそれぞれ別々に装丁（製本）されはじめた。最初の状態がどのようなものであったか、この時期にはもはやわからなくなっていたと考えられる。これが学術研究の対象となるのは一八世紀後半以降のことである。その嚆矢は、貴族のM・M・シチュエルバートフ公が一七六九年に旧総主教庁図書室にあった写本の束から、「ツァーリリの書」（写本Ts）のテキストを出版したときのことである。

「集成」が作成後しばらくして分散の愛き目にあったことは、言うまでもなく大きな問題を引き起こした。つまり研究が始められてしばらくの間は、個々の写本（装丁本）に接した研究者は「集成」の全体像を把握できていなかった。各写

本がそれぞれ大きな全体の一部であることは理解できても、その全体は見えていなかったのである。全体像が見えてくるのは、処々に分散する諸写本に関する知見が揃ってきることである。その場合でも、写本全体をそろえて検討することができない状況が続くかぎり、不明点が数多く残るのもやむを得ないところであった。今回の「集成」全巻の刊行は、個別研究が進んで相当程度「全体」像が明らかになったことを意味するが、他方では、これによりようやく真の研究の前提が形成されたという側面もある。今日においても、未解明の点は数多く残っているからである。たとえば、内容の政治史、思想的分析はいうまでもなく、また編纂をめぐる諸事情（編者をめぐる諸問題、編纂の具体的な作業状況、最終的監修者の問題等々）を別にしても、写本間の関係、とりわけ雷帝治世を扱った最終二巻（写本SとTs）の相互関係はどうであったか、さらに記述は雷帝治世のどの時点までなされていたのか（いつ完成したか）など、多くが不明のままなのである。さらに現存写本の第四巻（G）は「ルーシ史」の一—一四年から始まっているが、それ以前のルーシ史記述（いわゆる「原初」に相当する部分）が「集成」に含まれていたかどうかについても見解は分かれている。いずれにせよ今回の刊行は、長い間の研究の歴史があつて、初めて可能となったのである。

刊行が遅れたもう一つの理由に、「集成」が長い間、独立の年代記とはみなされてこなかったことがある。すでに記したように、「ルーシ史編」のテキスト部分はこれまで個別分散的に刊行されてきた。苦勞をいとわなければそのテキスト部分だけなら、およそ活字で読めるようになっていた。しかしこの活字化というのは、実は「ロシア年代記全集」の付録や、異読部分においてなされておらず、あくまでも主要年代記の付け足しとして印刷されたに過ぎなかったのである。

どうしてそのような扱いを受けてきたのかであるが、それはおそらく「集成」（とくにその「ルーシ史」部分）が研究史上長らく「絵入りニコン年代記」とみなされてきたことと関係がある。換言するならば、「集成」のテキスト部分は「ニコン年代記」をみればわかると考えられてきたのである。「集成」の細密画は唯一無二のもので、きわめて貴重である。その美術史的意義、歴史考古学的資料としての重要性ははかり知れない。しかしテキスト部分が「ニコン」とほぼ一致するというのであれば、無理にすべてを印刷する必要もないということになる。だがこの点にかんしても、研究の進展につれて今日異なる理解が行われるようになった。「集成」テキストは確かに「ニコン」（とくにそのオボレンスキー写本）を利用して作成された部分が目立つが、「ニコン」そのものではなく、それどころか多くの点で「ニコン」とは異なると考

えられるにいたった。今日では「集成」テキストは「ニコン」を含む多数の史料を利用し、ときには独自の記述を行っている場合のあることが判明している⁽⁵⁾。細密画はもとより、テキスト自体もすべて刊行する必要性が認識された結果が今回の刊行であった。

さて以上のごとき経緯で刊行されるにいたった「集成」とはいかなるものであるのか、以下にそのおよその内容を見てゆこう。

「集成」は三部に分けて刊行されたが、年代記編纂の歴史から見た場合には、これを二分して考えるのが適切である。すなわちそれは「クロノグラフ」と「レートビシ」の二部分からなっている。

「クロノグラフ」Chronografとはロシアにおける年代記編纂の一つの形式で、世界の創造からロシア史が始まるまでの、当時知られている限りの「世界」の歴史を記述したものである。当然キリスト教的世界観の立場に立つ。このジャンルはロシアでもキエフ時代から知られていたが（いうまでもなく当初はもっぱらビザンツの年代記の翻訳の形をとった。この場合とくに「クロニカ」Chronikaと呼ぶのが通例である）、ロシアでもモスクワ時代になってとくに一五世紀からはよらず、聖書の記述や文学作品、伝説、聖者伝の類その他

の物語や記録等から構成される読み物的な年代記的集成である。これにたいし「レートピシ」leposは編年記形式でロシア史を叙述した年代記である。それも通常さまざまな史料に依拠して編まれるが（記録文書、条約、法的文献、聖者伝、書簡、さらには文学作品も含む）、たんなる集成ではなく、編纂者の特定の観点から意識的総合的に編まれた歴史叙述の性格をもつ。モスクワ時代には国家ないし大公権の立場がとくに強く明瞭に打ち出される。

「集成」においては、全一〇巻の写本中第一から第三巻までが「クロノグラフ」部分で、「レートピシ」部分は第四巻から第十巻までである。刊行本でいえば、「聖書編」と「世界史編」と銘打たれた各五、一巻の、計一六巻（うちそれぞれ一巻は補巻）が「クロノグラフ」部分に相当し、「ロシア史編」全二四巻が「レートピシ」部分である。

さて「集成」の最初の部分が「クロノグラフ」であることは、ひとつの大きな意味を有しているように思われる。そこにはロシア国家が世界創造以来連続として続いてきた「世界」の諸帝国を引き継ぐ、ないしそれらに連なるものとする思想が表明されているからである。研究史上、ロシアは、とくに前近代においては、知的精神的に孤立しており、それゆえ知的水準も高くなかったと、決めつけられることがあるが（これは欧米中心のロシア史研究者からみたらや一方的な見解と

いってよい）、ロシア人自身は最初から自己を「世界」の中に位置づけ、自身の歴史を世界史との関連の中で見ようとしていたことがうかがえるのである。

ルーシにおける「クロノグラフ」編纂の歴史は古く、一世紀に遡る。つまりルーシ人は「原初」のような「レートピシ」（ルーシ史の記述）と並んで、早くから、というより最初から「世界史」（今日からみて、その内容がいかに偏ったものであるにせよ）に目を向け、もっぱらそれとの関連で自身を位置づけてきたのである。（「原初」にも冒頭部などにクロノグラフ的要素をうかがわせる部分があるが、基本的にはそれはルーシの歴史にささげられており、「レートピシ」とみなされよう。）しかもこのクロノグラフ編纂の志向は、一六、一七世紀になると、ルーシにおいてレートピシへのそれが薄れてゆくのに対し、むしろ強まり、年代記編纂の発展史における晩期にはむしろこちらの方が優勢になったといわれる。^②「世界」の中に自己を位置づけるという考え方が早くから、しかも長期にわたってあったということは、ロシアが必ずしも自身を特殊な存在とのみ理解していたわけではないことを示している。特殊性や独自性の強調は往々にして独善的な傾向につながるが、それが目立つのはロシアの場合、「スラヴ主義」や「ロシア精神」を強調した近代になってからのことである。キリスト教という一つの宗教に属することが、中

世のロシア人に初期「ヨーロッパ」人の自己認識と共通のものをもたらしたことは否定しようがないようにみえる。

さて「集成」「クロノグラフ編」の内容であるが、これ自体も二部分に分かつことができる。第一部(旧約)聖書編、第二部「世界史編」である。「聖書編」は写本で言えば、基本的に第一巻(M)の主要部と第二巻(KhS)の冒頭部を占める。「世界史編」は第一巻からすでに始められ、第二(Kh)、第三巻(LKh)と続く。このように二部構成とはいっても、「聖書編」と「世界史編」が完全に分離されているわけではない。聖書部分は「世界史」(最古代にあつては、それはユダヤ史にほかならなかつた)と密接に絡み合っているのである。旧約聖書に基づく世界の創造のときから人類(古代ユダヤ人)の歴史が始められることになる。古代ユダヤ史に続くいわば本来の「世界史」がこれに続く。具体的には前一二世紀とも一二世紀ともいわれるトロイ戦争を含む古代ギリシア史、さらにはヘレニズム世界の歴史(「アレクサンドリヤ」物語)、そして古代ローマ史(紀元三七七年まで)が続く、さらに一〇世紀までのビザンツ史が描かれる。ロシア人にとっての「世界史」とはこのような内容のものであつた。

写本各巻の内容をより詳しく見てみよう。

第一巻(M)は、一見逆説的ではあるが、「集成」のなかでもっとも遅く研究者に知られるようになった部分である。

一八九七年までそれはある私人のもとにあつたが、この年にモスクワの「国立歴史博物館」(GIM)が購入し、同館の所蔵するところとなつて研究者の利用に供せられるようになった。

写本の冒頭部に来るのが旧約聖書の「七書」である(いわゆるモーセ五書、すなわち「創世」、「出エジプト」、「レビ」、「民数」、「申命」。さらに「ヨシユア」、「士師」がくる。後述するごとく、第二巻Khに含まれる「ルツ記」もこちらに属すべきとする説が正しいとすれば、「八書」となる⁽⁸⁾)。これに挿絵がつけられている。モーセ、ヨシユア、ギデオンといったユダヤの英雄たちの戦闘場面を中心としたさまざまな物語が見事な細密画に描かれる。かれらの敵に対する勝利の場面が、イヴァン雷帝時代に作成されたモスクワ・クレムリ内の「黄金宮殿」Zolotaja Palataの壁画に見られたのも、理由がないわけではないのである。全体ではM写本には一〇三一紙葉、一七三三枚の細密画がある。

旧約「七書」に続くのが、「トロイの物語」(古代トロイの都市II国家創建から、ギリシア人による破壊までの伝説的歴史)である。それは中世クロノグラフ的観念によれば、イヌエル最初の諸王(ツァーリ)、サウルとダヴィデの時代(前一〇二五—一〇〇四—九六一ごろ)と同時期の出来事と考えられていた。この部分は基本的に、紀元一二世紀末のガイド・

デツレ・コロンネ（神聖ローマ皇帝・シチリア王フリードリヒ二世の宮廷詩人）による「偉大なるトロイの破壊の物語」に基づいているという。⁽²⁸⁾

写本第二巻 (KbS) は、三巻からなる「クロノグラフ編」の中間部に位置し、そのなかでももつとも内容豊かな巻である。テキストは内容的に三部に細分できる。各部分の構成は以下のごとくである。

(1) 聖書諸書—「ルツ記」⁽²⁹⁾、「王国記四書」(Cheytre knig. [sagstv. 「サムエル」上下、「列王記」上下)、「トビト」⁽³⁰⁾、「エステル書」。

(2) 世界史記述。預言者ダニエルの夢（カルデアⅡ新バビロニアのネブガドネザル王治世「前六〇五—五五二」年）におけるいわゆるバビロン捕囚（「前五八六年」）にかんする物語）に始まり、皇帝ヴェスパシアヌス治世（六九—七九年）までのローマ史を記述。⁽³¹⁾

(3) 本巻を締めくくるのは、ヨセフス・フラヴィウスの「ユダヤ戦史」(「ユダヤ戦記」)である。これは紀元六九—七〇年のローマによるエルサレム包囲攻略を目撃した当事者であるユダヤ人のよく知られた著作であるが、ルーシにおいてもこれは広く知られていた。

ヨセフスの「ユダヤ戦史」はローマ帝国の人々のためにギリシア語で執筆されたと考えられるが（著者本人の説明によ

れば、最初はアラム語で書かれギリシア訳されたという。ただアラム語版は今に伝わらない。ギリシア語は当時の東地中海世界における文化的共通語であった。これは後にラテン語にも訳された）、ルーシでは早くも一—一二世紀には翻訳され、広く読まれたと考えられる。⁽³²⁾一六世紀ごろのモスクワではこれはルーシ人に広く推奨される図書となっていた。モスクワ府主教マカーリーの上記「大教会暦」にも言及されている（二月、一月、七月部分）。「集成」研究史上興味深いのは、二〇世紀五〇年代にV・F・ポクロフスカヤがこの書の上発見したことである。ここからポクロフスカヤは「集成」編纂作業の具体的な手順を明らかにすることができると考えた。すなわち、かの女はKbS写本のユダヤ戦史にかんする記述とソロヴェツキー写本とを比較照合し、その結果、両部分が一言一句までまったく同一のテキストであることをつきとめたのである。「集成」中のユダヤ戦争部分はソロヴェツキー写本を基に作成されたということになる。具体的にいえば、ソロヴェツキー写本ではKbSで細密画が付されているテキストの箇所、蠟滴の印が付されていた。つまり名の知れない「集成」編者はソロヴェツキー版「ユダヤ戦史」を読み、どの部分を写筆し、絵を付すかを定めて、写本その箇所に蠟で印をつけ、その部分のテキストを写させ、そして絵を描

かせたのである。「集成」編集作業の実態の一部が明らかに
なってきたということである。その後B・M・クロスも同様
の蠟印のついた別の写本（「ニコン年代記（オボレンスキー
写本）」）を発見し、「集成」編集作業の実態解明に大きく前
進したこともここに記しておく。

写本第三卷（Lk_h、絵入りクロノグラフ）は、ほとんど
一〇〇〇年にわたるローマ、ビザンツ史を叙述している。具
体的には、ローマ皇帝ティトス治世（七九―八一年）に始ま
りビザンツのコンスタンティノス七世ポルフィロゲニトス治
世（九一―九九年）のレオン・フォカスの反乱）までを記す。本来
ここにあるべき紙葉一〇枚ほどがS写本に入っている（Sの
最初の六丁、三〇は、本来Lk_hの冒頭部に来るべきもの。ま
たSのII63296はLk_hの末尾に来るべきもの）。これは各写本
が最終的に装丁された時点で、紙葉の順序に混乱が起きてい
たことを示している（今回の刊行本ではこれは当然正され、
然るべき箇所正しく置かれている）。こうした例は他にも
みられるが、ここでは以上を指摘しておくだけに留めたい。

O・V・トゥヴォーロゴフによれば、本巻におけるローマ
史およびビザンツ史の叙述は、次の二作品を主要史料とし
て利用しているという。「ギリシア・ローマ年代記（第二版
祖型）」（一五世紀、遅くとも一四五三年には成立）および
「一五二二年版ルーシ・クロノグラフ」（後者はルーシと南ス

ラヴ人の歴史を世界史の一部とみなして編まれた最初のクロ
ノグラフ。スラヴ人の起源、ブルガリアの洗礼、主教イラリ
オン・メグレンスキー、セルビアのデスポート、ブルガリア
のツァーリらについての詳細な記述が世界史記述に取り込ま
れている）。

以上の「集成」写本の最初の三巻における「クロノグラ
フ」的叙述に続くのは、写本の第四巻から最終第十巻までの
「レートピシ」、すなわちルーシ史の叙述である。具体的に
は一一一四年から一五六七年のイヴァン雷帝治世途中までの
ルーシの歴史が描かれる。写本各巻は古い時代から順にルー
シの歴史を記述してゆくが、必ずしも厳密に年代順であるわ
けではない。たとえば第四巻（G）は一一一四―一二四七
年のルーシ史にあてられているが、奇妙なことに一四二五
―一四七二年の記述も含まれている。続く第五巻（L）、第
六巻（O・I）、第七巻（O・II）が一一一六―一二五二年、
一二五四―一三七八年、一三七八―一四二四年と順序良く記
述されているところから判断すると、第四巻の一四二五―
一四七二年部分は、本来第八巻（Sh）に含まれるべきもので
あったと推測される。既述のごとく、写本が各所に分散され
てゆく過程でこうした事態が起こったと考えられる。現写本
の第八巻（Sh）は、一四二五、一四七八―一五三三年の記述
となっている。

最大の問題を抱えるのは「集成」最後の二巻である（写本 S および Ts）。これは「レイトビシ」のなかでも「新しい時代」すなわちイヴァン雷帝治世にあてられた部分であるが、第九巻（S）は一五三三—一五四二、一五五三—一五六七年の、第十巻（Ts）は一五三三—一五五三年の記述となつている。両巻は部分的に重なつてゐるようにもみえる。これが研究史上、「集成」においてはイヴァン雷帝治世が二重に、S と Ts において別々に描かれてゐるとする見解、あるいは S が主で、Ts はその写し（清書版）、改訂版とする見方を生み出した。この両巻の関係をめぐつて研究史上さまざまな見解が表明されてきたのである。ここでこの問題に立ち入るわけにはゆかないが、イヴァン雷帝研究にとつてのきわめて重要な史料である両巻の関係が避けて通ることのできない難問であることは確かである。ここで研究史上の複雑な過程を省略して、近年の代表的研究者らが到達した結論を記しておく、両写本は本来雷帝治世史を描く一体のものであつたが、編纂ないし改訂の過程で、後に二つに分割されて今日に伝わることとなつた、というものである。両者を最初からそれぞれ独立した写本と捉えて雷帝史を構築しようとした研究者は誤つた前提にたつていたということになる。⁴⁹

ロシア史の最初期部分（すなわち一一二四年以前の「原初」に相当する部分）を記した紙葉も、かつて存在したがその後

失われたと多くの研究者によつて推測されてゐる。⁴⁸ おそらくビザンツ帝国の衰退が始まつて以後の、一〇—一五世紀の世界史（ビザンツ史）記述もあつたが、これまた失われ今日に伝わらなかつた可能性がある。さらにイヴァン四世治世の最後の一五年間（一五六九—一五八四年）を記述した紙葉（ないしその草稿）も、もしそれが実際に書かれた（描かれた）とするならば、その後失われたと考えられる。一八世紀中葉にはまだフォードル・イヴァノヴィチ帝の戴冠式（一五八四年）を描く紙葉が保存されてゐたことが分かつてゐるので（これも失われ、今日に伝わらないが、この部分は「集成」テキストを写した一七世紀の年代記から復元が可能であるといふ）、⁴⁹ 雷帝治世晩年についても書かれたと推測することができる。

「集成」の内容上の構成は以上のごとくであるが、ルーシ、とりわけモスクワにおける年代記編纂の特性を明らかにしようとする本稿にとつて、とくに重要なのは「クロノグラフ」部分である。ここでの編者の視野の広さは想像以上のものがある。ロシアは天地「創造」以来の「世界史」に直接連なる、現存する唯一の「正教」帝国とする認識が明瞭に示されてゐるのである。その意味では既述の「モスクワ・第三ローマ理念」を具体的に展開したものとみることもできる。こうした視野の広さはもちろん、当時のロシア人の知的水準の高さを示す、

というようなことではなからう。しかしこのことは、モスクワ時代のロシア知識人が自ら「キリスト教世界」の一員であること、換言するならば、「ヨーロッパ」的な存在であることを疑っていなかったことを明瞭に示しているように思われる。当時のロシア知識人の世界史認識の質がどのようなものであったかは当然問題になりうるが、いまはそこに焦点を当てる必要はなからう。中世のロシア人にとって「ヨーロッパ」、あるいは「キリスト教世界」が本質的な意味をもっていたということが示されれば十分であるからである。

『集成』はまだ刊行されて間もなく、研究はまだこれからと考えた方がよいが、ロシア（とりわけモスクワ時代の）の知的、文化的傾向、ロシア人の自己認識を推しはかるうえで、まことに貴重な文献がもたらされたということができると思う。

以上より筆者が到達した結論を以下に記して小稿を終えたい。

(1) キエフ・ルーシは形成期ヨーロッパの一員として存在した。南北の関係（ヴァリヤークからギリシアへの道）のみならず、東西の関係（ドイツからハザールへの道）にも注目する必要がある。

(2) ロシアは孤立した存在であつたわけではない。とりわ

けルーシがドニエプル中流域を拠点とするにいたつた八、九世紀以降には、ビザンツ帝国と並んで、形成途上にあつたヨーロッパ世界との間に密接な関係が築かれた。このことを考慮することなしに、ロシアの基本的な性格を理解することはできない。

広く言われるような、ヨーロッパとは異質のロシアという見方は、もっぱら政治外交的な視点に立脚している。そうした見方は、とりわけ近代国際政治に重点を置いたときに、強く出てくるように思われる。

社会経済史的には、ロシアは確かに、中世から近世、近代にかけての西ヨーロッパ諸国の急速な発展の前に、大きく立ち遅れたといえる（中世都市や農業革命の欠如等々）。これについてはすでに広く指摘されてきたことであるが、これらの点は自然、気候、地政学的諸条件（ステップ世界と常時対峙を余儀なくされたこと等）、加えて人口密度の希薄性等により相当部分が説明できよう。

(3) 他方、小稿で取り上げた文化・精神的観点に立つと、ロシアはなるほど古典文化的伝統には欠けていたが（遅れて出発したということでもある）、それを埋め合わせるかのよりに最初期からヨーロッパに強く結びつけられていたといえる。とりわけ王族に限定されるにせよ、人的側面での結びつき、キエフ大公家の西方との姻戚関係は重要であつた。文化

史的にビザンツをもヨーロッパととらえれば、関係は一層強くなる。キリスト教の受容を通してルーシの精神的、思想的根幹はヨーロッパと大きく共通するところとなった。この点は各時代の政治的動向や状況による紆余曲折はあったにせよ、基本的にはロシア史(ウクライナやベラルーシの歴史も含めて)の全過程を通じて、変わることはなかった。小稿はこの点について、中世史研究の根本史料と言える年代記の編纂の歴史、とりわけ近年、全体が刊行された「集成」を見ることによつて、具体的に示しえたかと考える。

注

- (1) 本稿は二〇一六年度東北史学会大会(二〇一六年一〇月一日、秋田大学)における講演原稿を基に執筆された。なお本稿ではロシア(キリル)文字はラテン文字に転換して記される。
- (2) *Polnoe sobranie russkikh letopisei*. M. L. 1841. (以下 PSRL と略記する。)
- (3) *Povesi' vremennykh let*. (PSRL. T.II Lavrent'evskaia letopis') Spb. 1846. 2e izd. L. 1926. 数種類の邦訳があるが、本稿で利用するのは、國本哲男ほか訳「ロシア原初年代記」(名古屋大学出版会、一九八七年)である。これは一九二六年の第二版(その一九六二年の復刻版)を底本とする訳である。本稿ではこの邦訳を「原初年代記」と略記する。
- (4) 「原初年代記」一、四頁。訳文は原則として邦訳に従うが、

若干変更している場合がある。

- (5) 「原初年代記」一七頁
- (6) たとえば、比較的最近の研究書である Ch. Raffensperger, *Reimagining Europe: Kievan Rus' in the Medieval World*. Harvard University Press, Cambridge, Mass. 2012. マツフエンスパーガーの問題関心は本稿の筆者のそれに通じるところがあつた。
- (7) 拙著「ロシア原初年代記」を読むーキエフ・ルーシとヨーロッパ、あるいは「ロシアとヨーロッパ」についての覚書」(成文社、二〇一五年)はまさにこうした問題意識の下に執筆された。本節はこれに依拠しながらの考察である。
- (8) 「原初年代記」一九一―二四頁
- (9) 「ヴァリヤギ招致物語」をどう読むかについては、拙著「ロシア原初年代記」を読む」とくに八九―一〇頁(第二章補論2)を、八一九世紀ドニエプル川中流域における「ルーシ」の活動については、同拙著、第一、第二章、とりわけ六五―八〇頁(第二章2節)を参照。
- (10) 拙著「ロシア原初年代記」を読む」三三三―四三〇頁(第七章3節)
- (11) 「ヴァリヤギ」にかんしては、拙著「ロシア原初年代記」を読む」六〇四―六三〇頁(第十章1節のi)を参照。筆者にはさらにこれを補足、展開する目的をもつ拙稿「ヴァリヤギ」とは何かーキエフ・ルーシにおけるスカンディ

- ナヴィア人、問題の再考」がある（近刊予定）。
- (12) オリガとビザンツ皇帝、ならびにドイツ王との間の関係・交渉については、拙著『ロシア原初年代記』を読む（二〇一―二六九頁）（第五章2節）を、また一―世紀半ば（一〇五四年）の東西両教会の「シスマ」および、それがルーシによりどう受け取られたか、さらにルーシが第四回を含む十字軍といかなる関係にあり、十字軍をどう受け取ったかについては、同拙著八一―八六四頁（第十二章1、2節）を参照。
- (13) Nazarenko A.V. Drevniaia Rus' na mezhdunarodnykh putiakh. Mezhdistsiplinarnye ocherki kulturnykh, torgovykh, politicheskikh svyazei IX-XII vekov. M.2001.s.71-112
- (14) この問題は拙著『ロシア原初年代記』を読む（六五八―七一頁）（第十章2、3節および補遺）で検討した。
- (15) 拙著『タタールのくびき―ロシア史におけるモンゴル支配の研究』（東京大学出版会、二〇〇七年）。バトゥの侵入とそれに続くモンゴル支配機構の樹立にかんしては第一、第二章、モンゴル支配の定着に大きな役割を演じたアレクサンドル・ネフスキー公（かれは西方からの「十字軍」に対しては逆に果敢に立ち向かった）については第三―第六章、侵入とその後の支配がロシアに与えた被害の実態と程度については、とくに第七章を参照。
- (16) 「第三ローマ」理念にかんしては、さしあたり拙稿「モス

クワ第三ローマ理念考」、『金子幸彦編「ロシアの思想と文学」（恒文社、一九七七年所収）を参照。この理念を最初に表明した修道士フィロフエイの書簡の訳は、拙稿「モスクワ第三ローマ以前」（『あうる』7、一九七九年）に含まれている。この理念にかんして筆者は、その後とくに近現代になって、これが政治、とりわけ国際政治との関連であまりに恣意的、無限定的に言及されるにいたった状況に鑑み、フィロフエイが表明した思想が実際にはどのようなものであったかを、当時の宗教・政治状況の中に正確に位置づけて理解する必要があると考えている。

- (17) この時期のロシアとヨーロッパの関係、思想面を含む多方面での交流についての文献は多量だが、さしあたり以下が重要である。Platonov S.F. Moskva i Zapad. Berlin, 1925; Malinin V.A. Rus' i Zapad. Kaluga, 2000; T.S. Willan, The Early History of the Russia Company. 1553-1603. Manchester University Press, 1956; E. Amburger, Die Anwerbung ausländischer Fachkräfte für die Wirtschaft Rußlands vom 15. bis ins 19. Jahrhundert. Wiesbaden, 1968; E. Donnert, Rußland an der Schwelle der Neuzeit. Der Moskauer Staat im 16. Jahrhundert. Berlin, 1972. S. 311-339, 435-473; Alpatov M.A. Russkaia istoricheskaia mysl' i Zapadnaia Evropa XII-XVII vv. M., 1973; D. W. Treadgold, The West in Russia and

- China Religious and Secular Thought in Modern Times. Vol.1. Russia. 1472-1917. Cambridge University Press. 1973: 69 (一九八五年)
- (18) ロシア史上「ロシアとヨーロッパ」問題がいかに本質的な意味をもっていたかは、以下にあげる若干の代表的邦語文献からただでもうかがえよう。T・G・マサリク(石川達夫・長興進訳)『ロシアとヨーロッパ』(成文社、二〇〇二―二〇〇四年、全三巻)。島山成人『ロシアとヨーロッパ―スラヴ主義と汎スラヴ主義』(白田書院、一九四九年)、勝田吉太郎『近代ロシア政治思想史―西欧主義とスラヴ主義―』(創文社、一九六一年)。
- (19) 以上についても拙著『タタールのふへび』(ふへび第七章)、および拙稿「ロシアとモンゴリ」覚書』『西洋史論集』(北海道大学大学院文学研究科西洋史研究室) 11 (二〇〇八年)を参照されたい。
- (20) ロシヤにおける年代記編纂の歴史については、*ヤコブ・ワグネル*を参照。Shakhmatov A.A. *Obzrenie russkikh letopisnykh svodov XIV-XVI vv.* M., 1938. P. 156. *Istoriia russkogo letopisaniia*. XI-XV vv. L., 1940. Likhachev D.S. *Russkie letopisi i ikh kul'turno-istoricheskoe znachenie*. M.-L., 1947. Nasonov A.N. *Istoriia russkogo letopisaniia XI-XVIII veka*. Ocherki i issledovaniia. M., 1969.
- Lur'e Ia.S. *Obshcherusskie letopisi XIV-XV vv.* L., 1976. # 1 『原初年代記』以降もわが国における各種年代記の翻訳紹介は続けられている。たとえば、『ソヴエト第一年代記(古韓)』(古代ロシア研究) XII-XIX、一九七八―一九九四年)、『ヌスタリ年代記(古代ロシア研究) XX、二〇〇〇年―)、『イバーチイ年代記』(中沢ほか訳、『富山大学人文学部紀要』61、二〇一四年―)。
- (21) *Vostrenskaia letopis*. PSRL. T.VII. VIII. SPb., 1856, 1859
- (22) *Nikonovskaia letopis*. PSRL. T.IX. XIII. SPb., 1862, 1885, 1897, 1901, 1904
- (23) *L'vovskaia letopis*. PSRL. T.XX. Ch.1. 2SPb., 1910, 1914
- (24) *Stepennaiia kniga*. PSRL. T.XXII. Ch.1. 2SPb., 1908, 1913
- (25) *Velikie Minei Chetii* (Makar'evskie Chetii Minei). Izd. Arkheograficheskoi komissiei. SPb., M., 1868-1917. 冊主教マカーリーによる『大教令曆』は相当部分刊行されているが、完全な学術的刊行はいまだなく。詳細は Slovar' Knizhnikov i Knizhnosti Drevnei Rusi. Floraiia polovina XIV-XVI v. Ch.1. s.126-133 (N.F. Droblenkova) やそのほか 5 (『』) を参照。SPb. SKKDR. XIV-XVI v. 2. 巻記)。
- (26) *Lisevoi letopisnyi svod XVI veka*. [古] LLS 2. 巻記] Bibleiskaia istoriia. Kn.1-4 i soprovoditel'nyi tom. Podgotovka transfiteratsii i perevod s drevnerusskogoazyka. Seredriakova E.I., M., Akteon, 2010-2011; LLS.

- Vsemirnaja istoria. Kn.1-10 i soprovod.tom.Podgot. transliteratsii i perevod s drevnerusskogoazyka.Pankova M.M.,Kazakova E.N.,M.,Akteon.2010-2011; LLS. Russkaia letopisnaja istoria. Kn.1-23 i soprovod. tom. Podgot.transliteratsii i perevod s drevnerusskogoazyka.Kazakova E.N.i dr. M.,Akteon.2009-2010
- (27) LLS.Nauchnyi apparat.Kn.1-11.M.,Akteon. 2006-2008. 各巻に〇衆の挿本の解説を付録(28)に記す。
- (28) Morozov V.V. Litsevoi svod v kontekste otechestvennogo letopisanija XVI veka.M.2005.s.28
- (29) 後述を参照して「集成」は「よへて」に「ロシヤ史綱」のテクスト部分のみに限られ、その形式を形どって活字化されたものが、細密画を併せての「金巻」としての刊行は行われなかったといえる。ただし部分に限定した特別版の刊行は行われず、その「たふんせげ」 Povest' o Kulikovskoi bitve.Iz LLS XVI veka.L.1980 (「集成」中び金巻をそのSkazanie o Mamaevom poboišche「トトベ」挿記) (巻頭題) : Zhitie Aleksandra Nevskogo:Tekst i miniatjury LLS XVI veka. L.1990 (「集成」中びふたれを「ブレンサントル・ネフノスキー」の特別版)。その他「たふんせげ」年代記には、その細密画や研究対象としたPodovedova O.I. Miniatjury russkikh istoričeskikh letopisei.K istorii russkogo litsevo go letopisanija.M.1965.各巻には「集成」の細密画が数多く取
- りこまれている。
- (30) 以下「集成」の構成や編纂過程、写本状況、テクストの刊行史、また研究史について考察は、次に示す近年の諸研究によりなされる行われる。Shmidt S.O. K faksimil'nomu izdaniiu LLS //LLS.Nauchnyi apparat. Kn.1.s.11-14; Podobedova O.I. K voprosu o sostave i proiskhozhenii LLS vtoroi poloviny XVI v.// Problemy istočnikovovedenija. IX.M.,1961.s.280-332.Kloss B.M. Nikonovskii svod i russkie letopisi XVI-XVII vekov. M.1980.s. 206-265 (Glava Sed'maja: Litsevoi svod Ivana Groznogo) : Amosov A.A. LLS Ivana Groznogo. Kompleksnoe kodikologičeskoe issledovanie. M.1998; Morozov V.V. Litsevoi svod v kontekste : LLS XVI veka. Metodika opisania i izučenia razroznennogo letopisnogo kompleksa.M.2003.Sostavitel'i: Belokon' E.A.,Morozov V.V., Morozov S.A., Otvetstvennyi redaktor:Shmidt S.O.; Amosov A.A.,Morozov V.V. Metodika issledovanija ili zadannost' vyvodov? (Razmyslenija po povodu datirovki rukopisei LLSa Ivana Groznogo) //Materialy i soobščhenija po fondam Otdela rukopisnoi i redkoj knigi Biblioteki Rossijskoj Akademii nauk.1990.Pod redaktsei DIKiselevoi. SPb.1994. s.54-117
- (31) 「ヤーン」は「ヤーン」刊行状況は、その巻の LLS.

Metodika opisanias.27-35; Morozov, Lisevoi svod v kontekstas.19-21 を参照。

(32) について「集成」写本全一〇巻の概要と現所在場所を記しておこう。

第一巻。「博物館集成」Музейский сборник (以下Mと略記)。現在の所在場所—国立歴史博物館(モスクワ)(以下GMと略)。一八九七年に所蔵。(写本番号等については略)。一〇三三葉(三六・四 cm x 二五 cm, 厚さ一六一・一六・五 cm)。細密画二六七七。一八世紀の装丁。聖書に記される世界創造から前一二世紀のトロイの破壊までの歴史、古代ユタヤ(ヘブライ)および古代ギリシアの歴史

第二巻。「クロノグラフ集成」Хронографический сборник (以下KHS)。現科学アカデミー図書館(サンクト・ペテルブルク)(以下BANと略)。一七四三年から所蔵。一四六九葉(四〇・〇 cm x 二八・三 cm)、二五四九細密画。一七世紀の装丁。古代東方、ヘレニズム世界、古代ローマの歴史。

第三巻。「絵入りクロノグラフ」Лисевоi khronograf (以下LKh)。現ロシア国立図書館(旧サルティコフ・シチェドリン名称国立公共図書館、サンクト・ペテルブルク)(以下RNB [GPB]と略)。一八二七年から所蔵。一二一七葉(四〇・五—四〇・九 cm x 二九・〇—二九・二 cm, 厚さ約一五 cm)、二一九一細密画。一八世紀の装丁。紀元七〇年

代から二七七年までの古代ローマ史、および一〇世紀までのビザンツ史。

第四巻。「ゴリーツィン本」Golitsynskii tom (以下G)。現RNB [GPB]。一八三〇年から所蔵。一〇三五葉、一九六四細密画。装丁は一八世紀以後。一一一四—一二四七年、一四二五—一四七二年のロシア史。

第五巻。「ラーブチェフ本」Laptevskii tom (以下L)。現RNB [GPB]。一八二七年から所蔵。一〇〇五葉、一九五一細密画。一七一—一八世紀の装丁。一一一六—一二二二年のロシア史。

第六巻。「オステルマン第一本」Osternanovskii pervyi tom (以下O-I)。現BAN。一七四〇年代から所蔵。八〇二葉、一五五二細密画。一八世紀の装丁。一二五四—一三七八年のロシア史。

第七巻。「オステルマン第二本」Osternanovskii vtoroi tom (以下O-II)。現BAN。一七四〇年代から所蔵。八八七葉、一五八一細密画。一八世紀の装丁。一三七八—一四二四年のロシア史。

第八巻。「シユニエーロフ本」Shumilovskii tom (以下Sh)。現RNB [GPB]。一八一四年から所蔵。九八六葉、一八九三細密画。装丁は一九世紀以後。一四二五、一四七八—一五三三年のロシア史。

第九巻。「シノド(宗務院)本」Sinodalnyi tom (以下S)。

現GIM。一九二〇年代から所蔵。六二六葉、一二二五細密画。一七一一八世紀の装丁。一五三三—一五四二、一五五三—一五六七年のロシア史。

第十巻。「ツァーリリの書」Tsarstvennaia kniga (以下T)。現GIM。一九二〇年代から所蔵。六八七葉、一二九一細密画。一八一—一九世紀の装丁。一五三三—一五五三年のロシア史。

以上にうつて詳しくは、LLS Nauchnyi apparat Kn.1-10各巻の解説(第一巻の場合《Музейский спорник》 pervaya kniga LLS XVI veka.EI.Serebriakovo)と日本学術誌『Kodikologicheskoe opisanie (第一巻の場合)』同 Serebriakova (249)を、およびLLS Amosov LLS Ivana Gromnogos.13-15;LLS Metodika opisaniia.s.15-26;Morozov, Lisevoi svod v kontekste.s.11-19などを参照。

- (33) 『集成』の成立時期については長久間、一六世紀説と一七世紀説が対立しており、初期においては一七世紀説が大勢を占めていた。これを決定的に変えたのは一九世紀末のM・P・リハチョフの『集成』用紙にかんする研究であった(Likhachev N.P. Paleograficheskoe znameenie bumaznykh vodiannykh znakov.Ch.1-3.SPb.,1899)。用紙の「透かし模様」の分析と「うわばし」の素材の研究から、『集成』の成立が一七世紀初めはならず(正確には一六世紀七〇年代以降である)ことが明らかにされたのである。

その後の研究ではリハチョフの研究成果が考慮されずに、逆に用紙(主にフランス製、ほかにドイツ製、ポーランド製の紙が使用された)の製作(ないし購入)以前の時期を想定する研究者が相次いだりしたこともあったが、B・M・クロス、とりわけA・A・アモソフの研究以来(本稿注30参照)、今日では一六世紀七〇年代以降八〇年代にかけての成立と見なされる。

- (34) Tsarstvennaia kniga,te.leiopisets tsarstvovaniia tsaria Ioanna Vasilievicha ot 7042 godu do 7061. napechatans pis'mennago, kotoryi syskan v Moskve v Patriarshiei bibliotekе.SPb.,1769.

- (35) 『集成』(とくに「ルーシ史編」部分の)テクストの作成に際して利用された史料については、とりわけ『集成』テクストの「リロン年代記」との関係については、Morozov, Lisevoi svod v kontekste.s.87-132を詳しく。

- (36) 「ローマ字」を「クロノグラフ」については、それぞれShakhmatov, Obzrenie Russkikh letopisnykh svodov. s.361-372 (= Ego zhe. Istoria Russkogo Letopisanii. T.I.SPb.,2011.Prilozhenie 1.s.585-593)を、また「クロノグラフ」については、Tvorogov O.V. Drevnerusskie khronografy.L.,1975を参照。

- (37) Tvorogov, Drevnerusskie khronografy.s.3
(38) 第一巻(M)の構成等については、解説は《Музейский

sbornik) -pervaia kniga LLS// LLS.Nauchnyi apparat.

Kn.I.5.17-19 (Ei.Serebriakova) を参照。第一巻前半部の利用史料はもちろん「旧約聖書」テキストであるが、ルーシにはすでに一四九九年にノヴゴロド大主教ゲンナージーにより新旧約の完訳聖書が編まれていた(同聖書について は、さしあたり拙稿「ゲンナージーの聖書」【『』6、一九七八年を参照)。その他(Tolkovaia Paleiaからの若干の挿入記事などが主な史料であった。ただし本稿では「集成」の「史料」問題について十分に立ち入ることはできない。

(39) 「トロイの物語」はロシアではグイド・テッレ・コロネネ(Gvido de Kolonna/Guido delle Colonne) によるものが一五世紀末一六世紀初にラテン語から古ルーシ語(教会スラヴ語) に訳されて知られるようになった(Gvido delle Kolonne/Istoria v nei pisheto razorenii grada Troi Frigiskago tsarstvã . sozdaniï ego.M.1709.sm. SKKDR. XIV-XVI v.Ch.2.s.443-445 (O.V.Tvorogov) など) の書には邦訳がある。グイド・テッレ・コロネネ(岡三郎訳)「トロイア滅亡史」国文社、二〇〇三年)。モスクワではホメーロスの「イリアス」が直接利用されたわけではなかったのである。中世ヨーロッパで広く読まれたこの物語はロシアでも読者がある程度獲得したようで、イヴァン雷帝もこれを読んでいたと推測できる。かれの「クールプスキーあて第一書簡」に、「トロイの裏切り者アンテノー

ルとアイネアース」への言及がある(拙訳「イヴァン雷帝とクールプスキー公の往復書簡(II)」【『人文研究』(小樽商大) 72 輯(一九八六年)、一一一頁)。ロシアにおける「トロイの物語」の翻訳については、さらに(Troianskie skazania/Srednevekovye rytsarskie romany o Troianskoi vojne po russkim rukopisiam XVI-XVII vekov.Podgot. teksta i st. O.V.Tvorogova. L.1972) を見られたら。さらに SKKDR. XIV-XVI v.Ch.2.s.279-280 (O.V.Tvorogov) を参照。(40) 「ルツ記」に関しては、既述のとおり、それが本来Mに入っていたとする見解が若干の研究者から出されている(A・A・アモーンフら)。それによると、ルツ記を含む旧約のいわゆる「八書」は本来写本第一巻Mの冒頭部に収められていた。「集成」は成立当初、相当長期にわたり未装丁のまま、紙葉の束として存在していた。これが一七世紀に個々別々に装丁されたとき、「八書」の最後の部分であるルツ記が、誤って第二巻KbS冒頭部に入れられたという。これにたいしKbSの刊行本の解説者I・N・レベジェヴァはこの見解を根拠不十分と批判する。すなわち後者によれば、もし仮に「集成」の紙葉(写本) が長期にわたって綴じられず、装丁もされぬままに横たわっていたとするならば、紙葉は不可避免的に順序が混乱したり、あるいは部分的に散逸したりしたと考えられる。ところが実際にはKbSの一四六九枚の紙葉のうち失われたものは一枚とてない。KbS紙葉のこ

- の保存度の高さは本巻が成立後ほどなくして（直後ではな
らとしても早い段階で）装丁されたことを物語語の正確さ
つまりレズジェヴァによれば、現存MSの構成は成立当初か
らのものであったと主張している。《Chronograficheskii
sbornik》-vtoraia kniga LLS // LLS.Nauchnyi apparat.
Kn.2s.17-20 (INLebedeva)
- (41) この部分では、聖書「タニヘル書」や、遅くとも一三世
紀半には編まれていた「ギリシヤ・ローマ年代記」（ジ
ザンツのゲオルギオス・ノマルトールスおよびモンネ
ス・バララスの二年代記のヌラウ・ブルガリヤ語訳に基
づくルーシのクロノグラフ集成）さらにはマケドニア
のアレクサンドル大帝についての文学作品「アレクサ
ンドリア」、その他の歴史・文学諸作品が利用されたこと
を Letopisets Eilinskii i Rinskii. T.1. Tekst: T.2. Komme-
ntarii. Issledovanie. Ukazateli. SPb., 1999. 2001; Aleksandriia.
Roman ob Aleksandre Makedonskom po russkoi rukopisi
XV veka. Izdanie podgotovili M.N. Botvinnik, Ia. S. Lurie i
O.V. Tvorogov. M.-L., 1965; SKKDR. XIV-XVI v. Ch. 2. s. 18-20
(O.V. Tvorogov); SKKDR. XIV-XVI v. Ch. 1. s. 21-25
(E.I. Vaneva)
- (42) 『ユダヤ戦史』の古ルーシ語訳を刊行した N. A. メシ
チェールスキーは、三〇点の古ルーシ語訳の写本（一五
一八世紀）を列挙している。ルーシにおいても相当広
く普及したラビナールが、Meshcherskii N.A. Istorii
Iudaiskoi voiny Iosifa Flavii v drevnerusskom perevode.
M.-L., 1958. s. 15-21. 数種類の邦訳があるが、ラビナールに
記されている。
- (43) SKKDR. XI-pervaia polovina XIV vs. 214-215 (O.V. Tvorogov);
《Chronograficheskii sbornik》-vtoraia kniga LLS. 17-18
(INLebedeva)
- (44) Pokrovskaia V.F. Iz istorii sozdaniia LLS vtoroi poloviny
XVI v. // Materialy i soobshcheniia po fondam Otdela
rukopisei i redkoi knigi Biblioteki Akademii nauk SSSR.
M.-L., 1966. s. 5-19
- (45) Klass. N. Korovskii svods. 208-214
- (46) Tvorogov O.V. O sostave i istochnikakh khronograficheskikh
statei Litevogo svoda // Trudy otdela drevnerusskoi
literatury. T. XXVIII. 1974. s. 353-364
- (47) 以下の二写本では、行書体のテクスツの行間や欄外
に、草書体で、何か所にもわたって「追記 pripiski」が書
き込まれている。「追記」は監修者（それがだれかが重要
な論点となる。これを雷帝自身とみる研究者も多い）によ
る当初の記述に対する訂正ならし変更を示すものと考えら
れる。その意味でも雷帝期の政治上興味深い史料となつて
いる。これらの「追記」をめぐって、前世紀の中ごろから
七〇年代にかけてイヴァン雷帝の貴族弾圧との関連で、D.

N・アリーシッツやN・E・アンドレーエフ、A・A・ジミン、R・G・スクルインニコフら研究者間に激しい論争が繰り広げられたが、かれらは両写本(SとT_s)を、それぞれオプリーチナ導入以前と以後とに成立した別個の独立した写本とみて議論を展開していた。この論争についてここで立ち入ることはできないが(これについてはさしあたりAmosov,Morozov, Metodika issledovaniia, 68-71をみられたら)、この場合、かれらは結果として、すでにみられたN・P・リハチョフらの『集成』紙葉に関する研究成果(上記注33)に十分に耳を傾けなかったということになる。両写本の関係、さらには「追記」をめぐる問題について、今日の研究の到達点を示すものとして、さしあたり以下をあげておく。Protas'eva T.N. K voprosu o miniaturakh Nikonovskoi letopisi(Sin. N^o. 962)/ Letopisi i khroniki. Sb.statei. 1973 g. M., 1974. s. 271-285; Kloss, Nikonovskii svod. s. 224-226, 252-265; Amosov, ILS Ivana Groznogo. s. 167-183; ILS. Metodika opisania. s. 64-70, 203-206; Morozov V.V. Litsevoi svod v kontekste. s. 30-32

(48) 『集成』に本来一一一四年以前のルーシ史も含まれていたことは、クロスによってほぼ論証されたと考えてよいように思う。クロスは、『集成』の直接的史料の一つである「ニコン」のオボレンスキー写本の初期ルーシ史部分に蠟の印があることを発見した(その一一一四年以前の記述に

七六〇もの蠟滴の印があるという)。「集成」は最古のルーシ史にかんするテキストをこのオボレンスキー写本から写し取り、蠟印の部分に絵を付したと考えられるということである(前注45を参照)。

(49) フョードル・イヴァノヴィチ治世(一五八四―一五九八年)までの『集成』続編(一五六七年以後の記述)の存在についても、副次的根拠から推測される。これについてはとくにAmosov, Morozov, Metodika issledovaniia, 89-94. 両研究者は『集成』末尾にフョードル帝の戴冠について描く場面が存在したことに注目し、そこから最終的監修者がボリス・ゴドノフであるとする重大な結論に到達している。たとえば、すでに古典となった感のあるオットー・ブルナー(石井ほか訳)『ヨーロッパ―その歴史と精神』岩波書店、昭和四九年(とくに第十一、十二論文)。